

## 4. そだつー人生儀礼ー

菊地暁 (folklore.lecture@gmail.com)

\* 人生儀礼もしくは通過儀礼 (rite of passage, initiation)

・ 社会的地位の移行にともなう儀礼 (by ヘネップ)

①分離 (separation) ②遷移 (transition) ③再統合 (reintegration)

・ 当事者の自己認識 (identity) / 周囲の承認 (identification)

\* 誕生

・ 妊娠：帯祝い、産神…

・ 出産：産屋、産の忌、胎盤 (包衣) の処理…

・ 成長過程の儀礼：名付け、宮参り、食初め、初節句、初誕生、七五三、十三詣り…

\* 子供

・ 「七才までは神のうち」？：不安定な霊魂と肉体

・ 子供組：儀礼上の役割分担→人間関係の構築、社会的マナーの獲得

\* 青年

・ 「大人」= 「一人前」になるということ：ex. 力石

・ 成人儀礼：元服式、成女式…

・ 若者組と娘組：修養、警備、儀礼上の役割、交際・婚姻の仲介…

\* 子供／青年の近代／現在

・ 近代システム (学校、青年団、軍隊…) による合理化 (脱魔術化)・均質化

・ 「状況に埋め込まれた学習」から「脱・埋め込み (dis-embedment)」(ギデンズ) へ

・ <子供>の誕生 (by アリエス)、「立身出世」の期待

・ 「節目」の多様化≒曖昧化≒アイデンティティの不安定化

\* 文献

アルノルト・ファン・ヘネップ (Arnold van Gennep) 1977(原著 1909) 『通過儀礼』 弘文堂

フィリップ・アリエス 1980 (原著 1960) 『「子供」の誕生：アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』 みすず書房

柳田国男 1935 『産育習俗語彙』 恩賜財団愛育会

森崎和江編 1989 『日本の名随筆 77 産』 作品社

田嶋一 1983 「民衆社会の子育てとカリキュラムーセツまえは神のうちー」 「産育と教育の社会史」 編集委員会編 『民衆のカリキュラム 学校のカリキュラム』 新評論

高橋敏 1999 『近代史のなかの教育』 岩波書店

大塚英志 1999 『「おたく」の精神史 1980年代論』 講談社現代新書

七、産神と箒神

ウブガミ 九州阿蘇地方では、ウブサマとも云つて、産神を帯祝の日に祭り初める。此の地方では初子のみは里方で産するのが常習である。安産すると直に産飯を炊き、小さな美しい茶椀に山盛りにして、ウブサマに酒と共に供へる。これをウブママと云ふ。又それに圓石を添へる。エクボが出来るやうにとか、又は頭が丸くなるやうになど、云つてゐる。此の時の宴席に多くの人が寄れば乳が多く出るとも云ふ。又之を乳の神の名とする村もあり、之を祀つた社も阪梨村瀧室及南郷谷等にある。乳銀杏の瘤を削り煎じて飲ませると之れも乳がよく出ると云ふ。馬や牛の子を育てるにも祈願する。そして願ほどきには甘酒をあげる。(郷、七ノ五ノ二七頁。同、三一五頁。産、二九七頁)

筑前の大島でもウブカミサマと云つて居るが、難産の折には、此の神様が戸の棧に腰をかけるからと云つて、其處を箒で掃く。

又土佐長岡郡では、出産の時は、七夜まで毎日床の間にオブノカミサマを祭る。炊初穂と、雑

魚、並に雨垂の小石二箇を洗つて臍に乗せて供へる。オブと云ふのは、産の方言で、オブノカミは誕生を護る神かと云ふ。血の穢で他の神佛は拜まぬが、此の神のみを獨り祭るのである。(産、六ノ二ノ八九頁)

石見の波子でも産がすむと神棚に燈明を上げ、飯を炊いて之をウブノカミサマに供へる。味噌汁に團子を入れて産婦も食ふ。但し二十日間は青物を食はず、殊に葱を忌む。(産、二八九頁)

三河豊橋附近では三日目の湯初の日、父親は美しい小石を拾つて来て、白紙に包み、それを産神様として祭る。ウブカミ様に上げた膳は産婆が貰つて行く。七日は七夜と云つて命名日であるが、里方や縁者を招き産神様をも祭る。此の日招かれる者は産衣を贈る。(産、二六五頁)

信州上伊那の川島村などでは、産に取りかゝる前に、部屋の際に菓を二把立てる。之にウブカミがやどると云ふ。其の菓の前に盆に石三つと、鹽と酒をのせて上げる。三日衣裳の日には小豆飯を供へ、手傳の人にも饗應して、御禮を申して菓束を倒して歸つて貰ふ。(産、二六一)

同諏訪郡の落合村烏帽子区では、産室の壁に菓一束を立てかけて置く。之に産神様が腰をかけたてゐて、出産の儀を受けると云ふ。又湖東村では産室に菓束を飾り、之を産神様として祭り、御茶飯、鯉節などを供へる。出産して三日も経てば菓束は道祖神へ上げるか、又は外へ出して捨て

コノシロ 秋田地方では、胞衣を埋めるに人の踏まぬ地を選び、コノシロを添へて埋めるのが通例である。コノシロが無ければ、他の魚を添へる。(秋田風俗問答)

エナワラヒ 大津市誌下ノ一九七五頁に此の言葉があるが、胞衣を埋めに行く者が笑つて歸る風習は、足利時代の記録にも見えて居る。又沖繩國頭の興那では、イヤワレエと云つて、今尚ほ行はれて居る。命名の日、父は胞衣を火の神の後の軒下に埋め、『上ノ下ノ笑ヒソウリ、ヨイ』と云ふと、皆が一せいに笑ふ。(山原の土俗、一〇二頁以下) 又出産後や、半日を経て、それを軒下に埋める時、蟲が初めにその上を越すと云ふといけなくと云ふので、父親がその上を跨ぐのが普通である。(産、三二四頁)

イヤギサシ 大隅の喜界島では、子が生れると、母が臍を接いで居る間に、家人の誰かゞイヤギをさす。イヤギとは運命の意で、差すと云ふのは運を授ける意である、これには運定の昔話があつて、神様に悪い運を授けられぬ間にこちらで先手をうつて差すものと云はれて居る。イヤギ差しの方法は、海の幹を長さ一尺三四寸に三本切り、これを茶の間の東口の桁の上に差す。薄と薄との間を遠く差せば、次の子が遠く、近く差せば近く生れると云ふ。さしたイヤギは五日目に行はれるヤシチュンニエー(床ばなれ)の日に取り捨てる。イヤギサシと同時に、表の

庭へ木の枕を投げ出す風習もある。(産、三二〇頁)

アマモノ 甲斐の西山梨郡では、産後十一時までは哺乳しない。初乳の前は布で口中を拭き甘連湯を飲ませる。之れをアマモノと云ふカニクソ(胎便)を下させる爲めである。(西山梨郡誌、六五六頁)

アマアマ 丹後の宮津では、乳付前に嬰兒に飲ませるものをアマアマと云ふ。(宮津郷土誌) イヤフキ 肥前佐賀郡では、産後四日目の名付茶講の日まで、イヤフキと云つて、蔞の根を煎じて生兒に吞ませ胎毒を下させる。マクリよりも蔞の根が安全だと云ふ。イヤとは胞衣の事である。(民脈、六ノ六ノ七八一頁)

ウブハコ 長門阿武郡大島では、昔は泥のついた蔞の根を、そのまゝ洗はずに、ゴコウ(五香)に用いた。之をねぶらせると、ウブハコをよくすると云ふ。ハコとは便のことで、ウブハコとは即ち胎便のことである。

オグソ 佐賀地方では、カニババの事をオグソと云ふ。(民脈、五ノ三ノ二三八頁) カナババ 相模津久井郡内郷附近では、生兒の糞をかく云ふ。ガニクソ・カニババと云ふのも同意語で、高松邊ではガニゴとも云ふ。ゴコモ又便のことである。